

## 図書紹介

『木育のすすめ』 山下晃功・原 知子著

四六判 144ページ 1,314円(本体) 海青社 2008年3月刊

「木育のすすめ」と題する本書は、地球温暖化を防止し、持続可能な循環型社会を築いていくために、木材利用に関する教育活動として、2007年度から始まった「木育」を一層推進しようという意図で書かれた本である。執筆者の一人である山下晃功さんは、本誌にも2008年9月号から「木工の文化誌」を寄稿されている「ものづくりができる全国的にも珍しい大学教授」でもある。

木育は「森を育むための木材利用に関する教育活動」であり、「木材の使用がどのように、なぜ地球環境に良いのかを理解し、「木材利用（木で物を作る活動を含めて）が人間発達上、教育上なぜ良いのかを理解して行うこと」が木育の基本理念だという。そのために、義務教育段階での学習とそれを基礎に、その後の社会教育での学習を積み上げていこうという構想のもとに書かれた本である。教員養成大学の教授（学校教育を中心にした森林教育、木材、木材加工教育を担当）と出雲科学館創作工房という社会教育施設で女性木工インストラクターとして木材科学や木工の教育実践を展開している二人のコンビによる分かりやすく、かつ重要な内容を含む「木育」の指南書ともいえる本である。

内容は以下のように構成されている。1章：木育と「木工」について 2章：従来の木材利用普及の問題点 3章：木

育のスタート 4章：木育が必要な社会的背景 5章：義務教育と木育 6章：高校・大学・生涯教育における木育 7章：木育に期待される学習効果 8章：木育の今後の方向性 9章：木育学習プログラム 10章：これからの理想的な木育実践のために

以上の内容からも、壮大な構想のもとに取り組もうしている「木育」プログラムということが理解できる。

そもそも木工は「木材を使った製作（ものづくりの）システム全体を「木工」と表現することができる」と定義する。それに対し、木材加工は「木材に対して一つ一つのものづくりの基盤となる加工技術を実行すること」であり、「木を使った製作（ものづくり）のシステム全体を表現していません」と定義している。ここから新しい木育は「単なるものづくり活動」ではなく、「木を使ったものづくり活動を中心に据えて、従来からの貴重な木工経験則を活かしながら、木材科学や木材加工学などの学問的研究成果に裏付けられた知識、技術、技能に基づいた内容を融合させていくことが必要」だとして「新しい木工」という概念を提起している。

中学校の教育現場でも、また社会教育における木工でも活用できる内容がたくさんちりばめられている本である。是非一読を薦めたい。（沼口 博）